

1 事例の質的研究でも科学的か？

質的研究による少数例の科学的エビデンス

第28回日本看護科学学会学術集会／(株)医学書院共催ランチョンセミナーより

高木廣文

東邦大学医学部看護学科長

萱間真美

聖路加看護大学教授

はじめに

高木 本日は「1 事例の質的研究でも科学的か？」という、少し挑戦的なテーマでお話します。つまり少数例の質的研究に科学的エビデンスはあるのか、というお話です。

ポイントは2つあります。科学的なエビデンスとして研究結果を一般化する場合、やはり「科学とは何か？」という問題提起がなければ、科学的といえません。ですから、まず科学とはどういうものかを、構造主義科学論という考え方に基づいてお話したいと思います。これが第1点です。

第2点は、質的研究のテキスト解釈という大きな問題です。どんな研究でも、最終的には言語で何かを書かなければいけません。論文でも報告でも、また記述に用いる言語が日本語であれ英語であれ、まずテキストをつくり、それを解釈して自分が興味のある現象について説明を行なうことになりますね。そのときのテキスト解釈について「これは客観的に解釈できるのか？」ということが常に問題になってきます。

量的研究と質的研究の特徴

高木 まず量的研究と質的研究について考えておきましょう。立場上、「量的研究か質的研究か」という構図を設けてお話したいと思います。

構造主義科学論には、バックグラウンドとして現象学的な考え方があります。そのような考え方によると、ある現象を考える場合、普通とは逆の考え方をします。

有名な話ですが、「リンゴがある。あるから、見えるのだ」という考えは、客観的な世界が存在することをあらかじめ仮定している状況があるからこそ、「あるから見える」になります(図1)。現象学的な考えでは、これを逆転させて「自分が“見える”と思うから、つまり、リンゴというモノが心のなかに浮かんだから、(リンゴが)“ある”と考える」となります。「ある」から「見える」のではなく、「見えた」から「ある」と考えるということです。正確には「見えたと思うから、あると思う」ですね。この話は皆さん、聞いたことがありますね。

一般的に、心のなかのような内部世界と外の世界とは区別をするのですが、よく考えてみると、外部世界というものの自体は、夢であろうと、映画『マトリックス』のようなヴァーチャル・リアリティのなかに存在するモノであっても、現象とし

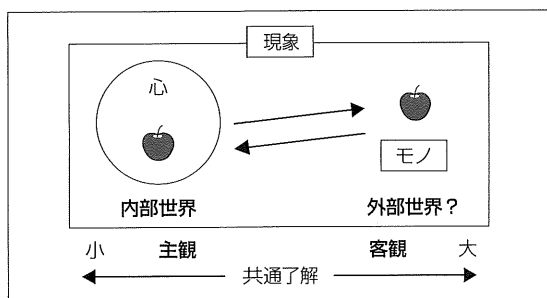


図1 内部世界と外部世界

てみたら同じで、区別できないですね。構造主義科学論のなかには、こういう現象学的な考え方が基本的にあります。

ただ、自分がそういうふうを感じるからモノが存在するのだといって、主観的にものごとを考えて、実際にある車を、ないと自分が思えばないのだ、と考えることにはならないですね。車の存在は不確かだからといって車に飛び込む人はいないでしょう。これはなぜかという、「皆の共通了解を得られるから客観世界がある」と考える」という立場に立っているからです。「外にある」と感じられるモノは、自分以外のほかの人とも話し合ったりして「それは確かにあるだろう」と確認しあうことができたり、また実際に直接触ってみたりすることで、共通了解は非常に大きなものになり、その存在を確信します。そのような世界における研究では、共通了解の非常に大きいところは客観的だと捉えられて、測定ができたり、皆で確認できたりする。このような考え方に基づいて行なわれる研究が、量的研究の世界だと私は思っています。

逆に心のなかの世界は、見ることができませんね。脳で考えたことを画像にする装置が開発されているようですが、あくまでそれは画像であって、心のなかのこまごましたことを言語化できるわけではありません。そして主観的な世界では、共通了解もなかなか得られないですね。こうした心の内部のことを扱う研究が、量的研究に対する質的研究ではなかろうかと私は思うのです。これが量的研究と質的研究の私の区別です。とはいえ

この区別は、実際のところ共通了解の程度の問題であって、明瞭に区別することはなかなか難しい。ですからここでは、量的研究は客観的なモノを測定できるという利点をもつ研究であり、一方、質的研究は「心のなかの世界のことについて行なうことのできる研究」というささやかな区別として考えておきたいと思います。

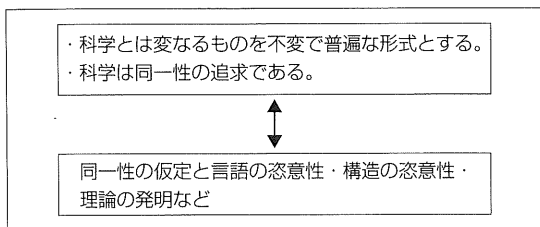
構造主義科学論から考える

次に科学の話です。科学論というのは、日本ではなかなか教えられていないですね。科学とは何かということが、わが国ではまるで自明のもののようにつえられているように思います。小学校や中学校、高校で哲学めいた形で教えられることはあるものの、正面から教えられた記憶は、私はありません。

■ ネコも水も実在するものではない？

私が、これまででわかりやすいと思った科学論は、構造主義生物学や、先の構造主義科学論で有名な池田清彦先生の『構造主義科学論の冒険』（1998）です。そのなかでは、「科学というのは同一性の追求である」とされ、科学は異なるモノを不変の形式にする、といったことがいろいろ書かれています（図2）。これはどういうことかという、例えば人間は皆異なっています。しかし実際は、異なっているものを「人間」という異ならない1つの言葉＝不変としていろいろな説明をしています。

科学というものには、基本的にプラトニズムなところがあります。プラトニズムとは、本来の意味は、モノにはその本質である「イデア」があるという考えですが、ここでは、ある概念やある言葉を使ってある構造をつくり、ある現象を説明するという意味です。例えば、これは池田先生の著作にあげられているのですが、「海の水」とか「水は



池田清彦(1998). 構造主義科学論の冒険. 講談社学術文庫, 講談社.

図2 構造主義生物学／構造主義科学論

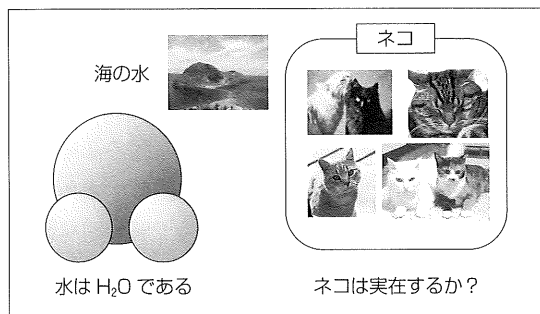


図3 同一性とは何か？

H_2O である」とか「ネコは実在するか」ということを考えるとします。「ネコは実在しますか？」と問うと、「ネコはいます」と、皆います。「ではネコを見せてください」と求めると、図3に示してあるような、いろいろなネコを出してきます。「これもネコ」「あれもネコ」と。しかし、よく見るとすべて違うネコですね。そのとき私たちは「このネコとあのネコは違う」と思います。では、「ネコとは何だ？」と考えると、実際には「ネコ」とは総称名であって、「ネコ」というものはいないことになります(笑)。正確に言えば、「ネコ」はいなくて、「あのネコ」「このネコ」「その白いネコ」「私のところで飼っているネコ」が存在する。このように個別として異なるモノを、「ネコ」という1つの名前で総称してしまう。これが同一性です。

「水は H_2O である」に関しても、スライドの模式図を見ると「これがOで、これがHだろう」と想像するかもしれませんが、あくまで模式図であって、このような形のモノは存在しません。つまりこれは、嘘です。ただこのような形で示されると、それがあたかも存在するかのように私たちは思うのです。私たちがいう「水」とは、例えば海

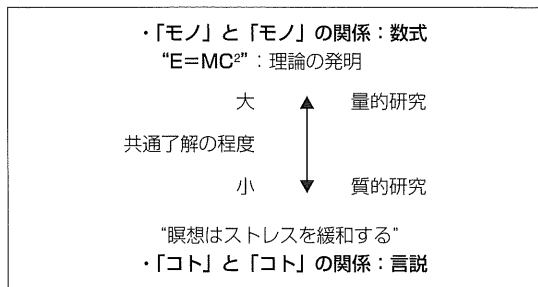


図4 多様な科学理論—現象の説明・予測

水だったり飲み水だったりで、「 H_2O 」ではない。「水」の状態とは、 H_2O が10の何乗個かあって、そのようになっているという話です。水1 molだと、例えば18 gで約 6×10^{23} 個の分子があるわけです。 6×10^{23} 個とは、地球の人間が大体 $6.5 \sim 6.7 \times 10^{10}$ 人ぐらいなので、その 10^{13} 倍ぐらい多い。そのくらいが集まっているいろいろな相互作用があってはじめて水の状態に見えるのです。だから H_2O は、水ではありません。しかし H_2O を水と考えると、科学の形式として、とてもわかりやすいですね。いろいろな反応が式として書けます。水素だったらH、酸素だったらOにしましょうということになります。これが、科学とはプラトニズムであり構造主義であるという話で、ある現象を表わすときに、いろいろ仮定をおくと都合がよいということです。

モノとモノとの関係を考えてみましょう。例えばエネルギーという概念があります。エネルギーとは、質量と光速の2乗で、図4のような関係式「 $E=MC^2$ 」をつくります。このような式は理論であり、頭のなかで考えて発明するものです。理論を「発見する」とよくいいますが、発見ではありません。昨年、わが国でノーベル物理学賞に3人選ばれましたが、あれも発見ではなく「発明」です。4個のクォークでは説明できないから6個にした。するとうまく説明できた、というのが正しいのです。ニュートンの万有引力の法則も、リンゴが落ちて発見したのではなく、いろいろと考えて「こうしたらいいだろう」と発明しているのです。リンゴを割ってみたら、なかに書いてあったというものではないのです(笑)。

図4に示したものはモノとモノとの関係式なので非常にわかりやすい。量的に書かれていて共通理解が得られやすいし、観察もできます。科学とはそういうものであり、このようなモノとモノとの関係を、池田先生は「厳密科学」と呼んでいます(池田, 1998)。関係式を用いたらとてもうまく説明できたので、皆そういう形式をとりたいと考える。心理学の分野でも計量心理学というものが一時流行し、心の問題をモノの関係で考えることがよく行なわれました。現在でも尺度の開発や使用は、このような考え方と関係があります。

ところが、科学的理論を文章で書くということもありえます。「瞑想はストレスを緩和する」という考えがあるのですが、仏教国のタイでは、HIVの患者さんたちが夜に読経をあげたり瞑想したりすることが実際にあり、そうするとQOLがよくなるというようなことをいっています。ストレスを緩和することも、実はコトとコトの関係、つまり心のなかのことを関係で表わしているわけです。これは言説であり、すなわち言葉で説明されているものです。もともと記号というのも、一種の言葉なんですけれども、普通の言葉は記号ほど厳密な意味がなく、あいまいな部分があります。しかし、言葉も、ある現象に関してその構造を考える道具です。理論の構造が、数式のようなものから、言葉で因果関係を示すようなものまですべて含んでいると考えれば、これもやはり科学的な説明のための理論になります。

では、そうするとすべてのものが科学的になるのかというと、それには当然、制限があります。すなわち、理論は、現象をうまく説明できないといけません。現象をうまく説明できなければ、それは価値がないとされ、捨て去られていく。こうした形で、科学は進展していくのだという考え方、これが構造主義科学論の考え方です。

質的研究も、以上のような科学性が担保されれば科学の領域に入る、あるいは科学である、と主張してもよいことになると思われるかもしれませんね。

ところで、量的研究ではエビデンスが重要にな

ります。科学性があるからエビデンスがある、とはいきません(図5)。量的研究にはエビデンス性にいくつかの段階があります。科学的な言説として認められても、エビデンスがあるかどうかということは、また別の話ということになります。質的研究への批判はいろいろありますが、科学性についての批判に対しては、構造主義科学論で考えればよいのではないかと思います。しかしそうはいってもやはり、ケースの選び方が非常に恣意的だとか少数だとか、またデータの分析・解釈が主観的だといったことが、よくいわれますね(図6)。

こうした批判の背景には、量的研究の基礎となる統計学のように、方法論として誰にでもわかるような、先の言葉でいう皆の共通理解の問題があります。要するに、数字で示せば共通理解ができるということです。確率0.05とか0.01といえは皆わかりますが、言葉で示されたようなものは非常に主観的に捉えられる。すると、主観とは何かという問題が出てきますね。これをきちんと考えておかなければいけません。

■ テキスト解釈の問題

質的研究と量的研究では解釈の仕方に違いがあります。量的研究は、先にお話したように統計学を用いたevidence based approachです。一方、質的研究は、テキスト解釈がメインになるのではないかと私は考えます(図7)。後でお話しますが、言語とはよく知られるように、恣意的なものです。ですからテキスト解釈は必ず主観で行なわれます。このようなところが量的研究者や、一般的な、いわゆる科学者と呼ばれる人たちにはなかなか納得がいかない。ではテキスト解釈とは何なのか。

会話の解釈を行なうとき、例えば「何かが心配だ」とか「手術前は不安です」「病気になったら嫌だ」「死ぬのが怖い」という言葉があったとしたら、そこにはそれぞれ、ある概念が存在します。面接や観察をして相手の話を聞くと、それぞれがスライドのA, B, C, Dのように、いろいろなこと

- ・リサーチ・クエスチョンに応じて選ぶ
 - ・何を研究するのかに依存する
 - 構造構成主義：関心相関的に選択
- ↓
- 量か質か：科学的方法論としては同等
- ・「エビデンス」性は保証しない！

図5 科学性の担保はエビデンス性？

なぜ量的研究者は、質的研究を非科学的だと批判するのか？

- (1) ケースの選び方が恣意的で少数すぎる。
- (2) データの分析、解釈が主観的である。

量的研究の基礎

統計学・基礎的方法論
evidence based approach

図6 質的研究への批判・1

- ・量的研究：統計学 evidence based approach
- ・質的研究：テキスト解釈の問題
言語の恣意性、テキスト解釈の主観性

図7 質的研究でのテキスト解釈の問題

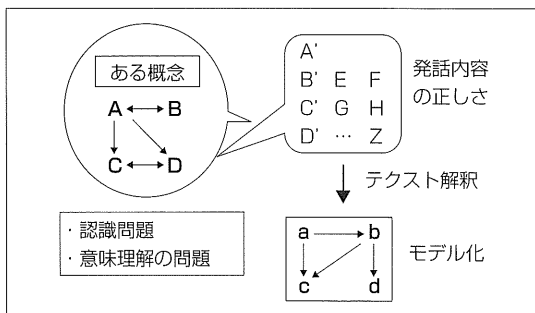
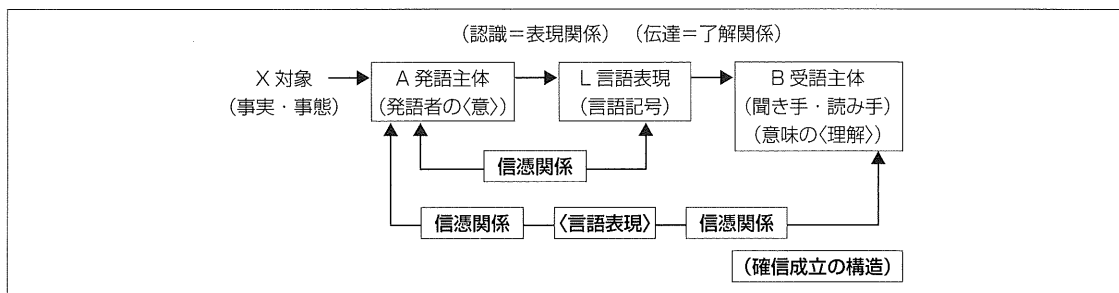


図8 会話の解釈の妥当性は？



竹田青嗣(2001). 言語的思考へ—脱構築と現象学. 径書房, p.128.

図9 言語的信憑構造

をいいます。このインタビューデータをテキストに落として、a, b, c, dとモデル化していきます(図8)。現象学で有名な竹田青嗣先生は、このようなプロセスにおいての2つ問題、すなわち認識問題と意味理解の問題があると述べています。認識問題とは、話す人が正しく発話できるかという問題です。「とても大変だった経験について話してください」と尋ねたとき、それをどういうふうに話すか。きちんと正しく話せるのかという問題です。そして意味理解の問題とは、話を聞いた側が話の意味を正しく解釈できるかという問題です。

確かにそのとおりだろうと私は思います。竹田先生は、『言語的思考へ—脱構築と現象学』(2001)

という著作のなかで、テキスト解釈に関しては20世紀の哲学界でも問題となった。解釈はできないといったことをウィトゲンシュタインがいつているのだが、「実際の会話においては、われわれはそんなことはないのだ」ということを、図9に示したような構造をもとに述べています。

例えば、発話する主体(A)が突然「空は青いね」という。それを聞き手(B)はどう解釈するか。そこにはいろいろな意味がありますね。「今日はいいい天気だから空が青い。よかった」という意味もあれば、「空は青いね」といって、それに対する同意を求めていることも考えられる。また「空は青いね。だけど僕の心は暗い」ということを暗に示しているのかもしれない。つまり、同じ言葉を発



したとしても、それぞれ意味は異なることが考えられる。発語した人が正しい言語表現をすればそのままの言葉を発するわけで、聞き手が言葉の意味がわからなかったら、「どういうこと?」と聞けばよい。普通の会話では、そういうことが可能です。それはインタビューなどでも当然同じで、1度聞いた段階で理解できれば、それは「信憑関係」があるということになります。つまり、会話の間に言語の信憑構造というものが存在すれば自分はわかったと思う、ということです。私もそう考えます。もしも意味がわからなければそのまま放っておかないだろうということですね。例えばインタビューでよく意味がわからないままに進んでしまうと、その部分の意味が後でわからないということは当然起こり得ます。竹田先生は、現実の会話では確信が成立するようにすると述べています。しかし、どうして確信が成立するかは述べられておらず、確信は到来的な本性(ほんせい)をもつことで「わかるのだ」とされています。確かに実際に話していて、日本人同士ならある程度わかるということはあると思います。「到来的」とされてしまうと、「わからないこともあるだろう」「どうして“到来的”なのか」という疑問も浮かんでしまいますが。

■言語学から考える

次に言語の観点から考えてみましょう。言語学者として有名なソシュールの『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義—エミー

ル・コンスタンタンによる講義記録』(相原奈津江, 秋津伶訳, 2003)という本を読むと、少しわかりやすくなります(図10)。

例えばリンゴを見たとき、私たちは「あ、リンゴがある」と思います。先ほどお話ししたように、この「リンゴ」とは、実際には私たちがそれについて言語で表現して、それに意味を付与したものという二面性がある。そして、リンゴを英語でいえば「アップル」になりますね。このように名前として日本語と英語で異なってくるということが、言語の恣意性です。これはわかりやすいですね。

少し難しい点は、言語は差だけで、あとは否定的だということです。どういうことかということ、赤ん坊が最初に言葉を覚えて「ママ、ママ」というようになった。でも最初はパパもママも区別なく、すべてママです。そのうちにこちらはママ、そちらはパパと、区別して覚えていく。また「ワンワン」という言葉を覚えると、ネコがきてもワンワンという。それを「これはワンワンじゃないよ、ニャアニャアだよ」と教えてあげる。このように差別化して恣意的に名前を覚えていって、それ自体を示すというより、他のモノとの差で示すのです。このような形式で、言語はできていくというわけです。

しかも言語(ラング; langue)は恣意的だといっても、頭のなかで構造化されていくものなので、恣意的といっても、実際にはデタラメなわけではありません。社会的に通用している言語しか使用できないので、発話(パロール; parole)によって、繰り返し頭のなかに構造化していく、とされています。言葉ができていく過程というものは、常に社会的に構成されているはずであり、共通的な構造で成立してつくられているらしい。言語は、恣意的であるけれども、社会的に構成されていく。しかも、個別に個人の頭のなかで構成されるのです。例えば日本語はどこにあるかと問うても、「日本語」というものは存在していません。それは皆の頭のなかにしかないものです。「本に書いてあるでしょう」といっても、それはあくまで「本」であって、日本語が実在物として存在する

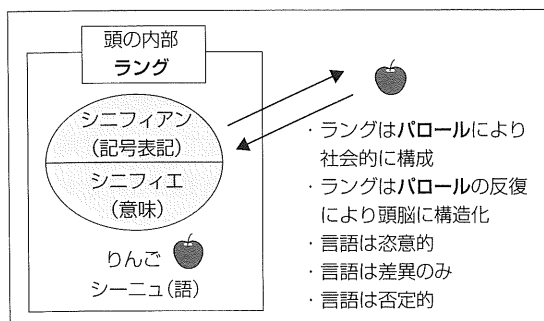


図 10 ソシュールによる一般言語学

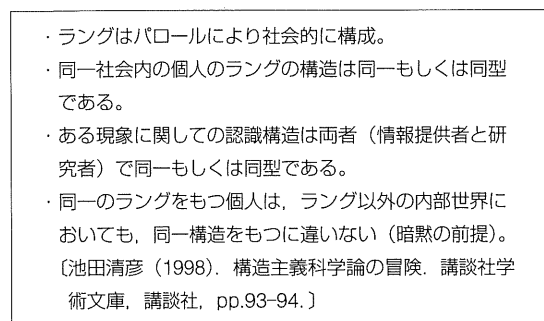


図 11 テキスト解釈の基本仮説

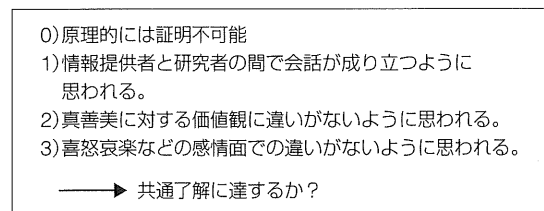


図 12 認識構造の同一性／同型性の仮説は正しいのか？

わけではない。言語とはそういうものである。ソシュールは、以上のようなことをはじめて指摘した人です。

これをテキスト解釈の問題とあわせて考えてみましょう。言語とは、発話によって社会的に構成されているものであり、結局、言葉が通じるということは、同一の社会内において個人個人の言語の構造が、基本的に同型でなければいけない。同型でなくとも、ある程度同じ構造をしていなければ、会話が成立しないだろうということです。そして同時に、認識構造もほぼ同一、もしくは同型でなければならない。つまりインタビューでも、対象者（情報提供者）と研究者が話をして通用する

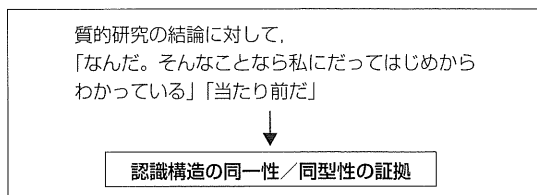


図 13 質的研究への批判・2

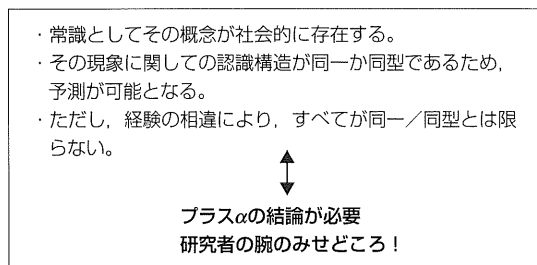


図 14 「わかっている」とは？

ということは、認識構造が同一だからに相違ない、ということなのです。池田清彦先生は、そのような仮定のほかに、同一の言語をもつ個人、例えば日本人であれば、感情面や倫理面などの内部世界もほぼ同じで、暗黙の仮定があるのだ、という趣旨のことを述べています（池田、1998）（図 11）。結局、このような原理を証明することは、原理的には不可能ですが、会話が自然に成り立つことや、また「信善美」などの価値観、喜怒哀楽の感情面などのあり方に大きな違いはないことなどからも、恐らく正しいのではないかと仮定できると思います（図 12）。

質的研究に対する批判に、結論に対して「そんなことはわかっている」「当たり前結論ではないか」というものもありますね。これは「なぜ当たり前と思うか」「なぜ最初からわかっていると思うか」という点に深い意味があるだろうというのが、私の直観です。つまり、認識構造が同じだからだろうと私は考えます（図 13）。「わかっている」ということは、ある程度常識のこととして、そのような概念が社会的に共通に存在するということであり、予測が可能なことではないでしょうか。

例えば、タイの HIV/AIDS の人たちにインタビューを行ない、「初めて HIV に感染したとき、どう思いましたか」と聞くと、タイ語で「シアチャ

イ」と答えが返ってきます。シアチャイとは「ブ
ロックンハート」、すなわち「心が張り裂ける」と
いったことを意味します。そのほか「子どもの将
来が不安だ」「自分の死が怖い」というような回答
があります。こういう回答が返ってくることは、
尋ねる前から実は多少推論できますね。これはあ
る程度、認識の仕方が日本でもタイでも共通だか
らです。だから予測が可能なのですね。もちろん、
各人の経験は異なっているし、文化的な差もある
かもしれませんが、その場合には、すべて同一/
同型とは限らず異なった部分もあるのだというこ
とを踏まえれば、現象理解もより円滑に進むだろ
うと思います(図14)。「わかっている」とはそうい
うことです。ですから、「わかっている」といわれ
たということは、そういう結論や概念は、実際に
存在するのだろうと考えていい、ということでは
ないかと思うのです。

科学とエビデンス

最後に、エビデンスについてお話しします。これ
までお話してきた言語の成り立ちの点などから考
えると、テキスト解釈は主観的に行なっていなが
らも、実は必ずしも、自分だけがそう思って解釈
しているわけではないということがいえるのでは
ないでしょうか。

■エビデンスと一般化可能性

エビデンスというと、必ず一般化可能性の話が
出てきますね。「これは少数例だから一般化でき
ないですよ」とか「あなたの行なった研究を一般化
できますか」というような指摘はよくありますね。
つまりそれは、逆に一般化できればエビデンスが
あると考えられます。「エビデンス」という言葉は、
もともと明証性、証拠などいろいろな意味があり、
明証的にわかる、使える、予測ができるというこ
とですから「一般化」とほぼ同じだろうと思います。

この点に関しては、インという人が「分析的一
般化と統計的一般化」ということを述べています
(イン/近藤, 1997)(図15)。量的研究は統計学を
用います。これは統計的一般化です。統計的一般
化とは、非常に小さな標本で母集団での分布や関
係式、頻度などを推定したりすることであり、母
集団に関する仮説検定を行なったりするという形
式です。ゆえに、サンプリングの方法もランダム
でなければならないといった制約がつくわけ
です。臨床で研究を行なうのなら、無作為化した割
りつけをしなければいけません。これはすべて母
集団での話を考えている統計的一般化なのです。

ところが質的研究というのは、必ずしも母集団
の特性を推定するわけではありません。ランダム
化できればそれに越したことはないですが、そう
いうことをしなくてもいい。なぜかという、質
的研究は分析的な一般化だからです。すなわち、
理論の一般化です。1例であってもいろいろな現
象を記述し、それがほかの例に使える部分がある
だろうということですね。ですから、1例だから
といってほかのものに全く使えないということ
はない、ということが考えられます。これを、西條
剛央先生は「継承とアナロジー」と述べていま
す(西條, 2005)。昨年のランチョンセミナー(本誌
41巻2号, pp.139-152, 2008)でも少しお話し
しましたが、このような理論の一般化という点では、
糖尿病の例と HIV/AIDS の例が似ています。昔
は、HIV 感染は死が避けられませんでした。が、
タイでは 2003 年から anti-retroviral therapy の
無料提供が導入されたことで事情が変わり、考え
方も変わってきたようです。以前のインタビュー
では、死ぬのがほんとうに怖いという話をよく聞
きましたが、現在は、糖尿病患者と同じようなこ
とを語ります。つまり、基本的に薬を飲み続けて
日常生活を送るということです。HIV/AIDS で
ある自分たちを糖尿病の患者さんと同じようなア
ナロジーで語るようになったというわけで、これ
はとてもおもしろいと思います。つまりこのよう
なことを示すデータがあれば、1例報告であって
も、上のようなアナロジーなどを用いれば、すべ

「分析的一般化」と「統計的一般化」

〔ロバート・K. イン／近藤公彦訳（1997）．ケーススタディの方法 第2版．千倉書房〕

・量的研究：統計的一般化

母集団での分布，頻度の推定

・質的研究：分析的一般化

理論の一般化と拡張

・「継承とアナロジー」

〔西條剛央（2005）．構造構成主義とは何か―一次世代人間科学の原理．北大路書房〕

・ある現象に関する社会における認識構造の同一性の仮定：「情報提供者と研究者の認識構造の同一性／同型性の仮定」

・「一回起性の出来事には、あらかじめ共通な事実が含まれている」

〔池田清彦（1998）．構造主義科学論の冒険．講談社学術文庫，講談社，pp.31-34〕

・現象への整合性により一般化の程度を評価

図 16 分析的一般化の根拠

図 15 エビデンスと一般化可能性

てに一般化することはできなくても、拡張は可能なのではないかということです。なぜなら一般化の根拠としては、先ほどお話した言語の認識構造の同一性／同型性に関する仮定が成り立つのではないか、ということが考えられるからです。

■一回起性の問題

もう1つは、一回起性の出来事でも、そのなかには共通の事実が含まれていることが多いという点です（池田，1998）。つまり1回しか起こらないことでも、それを使えないことはない（図16）。

奇妙な例に思われるかもしれませんが、「カラスは黒い」という、科学的な言説があります。では、白いカラスがいたらどうなるのか。これは、ポPPERという人の「反証可能性」の例です。反証可能性とは、ある仮説に対して、実験や観察によってそれが間違っていることを証明できる（＝反証できる）かどうかという概念です。ポPPERは、科学は反証可能でなければいけないと考えました（中山，2008）。この例の場合、「カラスは黒い」ということが反証できるのか。つまり、例えば白いカラスがみつければ、「カラスは黒い」ということに対して反証できることになります。ここで、おもしろいことに気がつきます。「白いカラス」とは奇妙な表現ではないでしょうか。カラスとは黒いものだと私たちは思っていますね。しかし、実はそれは1つの特徴にすぎません。ほかのいろいろな共通部分から、白いカラスを見ても、それが

カラスだとわかりますよね。つまり、黒や白という色は1つの本質的なものではあるけれども、同時にほかにもいろいろと共通する事実があるということです。

しかもポPPERは、科学は演繹的でなければいけないともしています。いろいろな理論をつくるということは、種々のデータからみて帰納的にモデルをつくり、モデルに今度はデータがあてはまるか確認する。モデルとは先にお話した科学的な理論のようなものですが、このようなモデルを用いて、今度は現象を解析する。帰納と演繹が回転していくようなグルグル回るモデルになるわけですね。そうしたときに、1回しか起こらないようなことであっても共通する部分があるわけですね。実はすべてのものは1回しか起こらないのです。

科学的な理論とは、このように狭窄物を減らしながらつくっていくのです。ニュートンの万有引力の法則にしても、モノをなんでも投げたら理論どおりにいくというわけではありません。空気抵抗があったり、投げるモノの形があったりするからです。しかしそういうことを考えながらただただ観測していても、うまくいきませんよね。そのなかに共通する事実を見いだしていこうということが大事なステップです。すべてのものは一回起性であり、個物はすべて異なる。そのなかで科学理論をつくるためには、やはり概念を抽出したり、非常に抽象的な事柄を1つひとつ積み重ねたりしていかなければなりません。

質的研究であっても、最初は記述することから入ると思いますが、記述して現象をうまく説明できたら、それを概念化したモデルをつくります。

そこでまた現象をうまく説明できるかもしれないし、もしかしたらある部分ではできないかもしれません。できなければ、また変えていくのです。そのような繰り返しのうちに、一般化がどの程度できるのかということで、評価ができるのです。

1事例であっても、その現象をうまく捉えて、少なくともその現象についての説明がうまくできるのなら、ほかの事例にもなんらかの形で使える可能性が出てきます。このような形で研究を行なっていけば、エビデンスとして使えることもあるかもしれません。エビデンスをどの程度のレベルで考えるかにもよりますが、確度のかなり高い科学的事実として、現象に適合するようなモデルを発展させていくことも可能なのではないかと、私は思います。

1 事例の研究結果に エビデンスはあるのか 萱間真美氏からのコメント

萱間 今回はあえて意図的に「1事例でも科学的か？」という問題設定をしました。先ほどもお話があったように、「科学的か？」ということと「エビデンスとして使えるか？」ということとは、前提そのものが異なります。そこがきちんと整理されないために、日常の議論がかみ合わないように思います。例えば、「制度をつくるからエビデンスを出してください」というようなことがよくいわれるのですが、これも、議論に参加する人たちのそもそもの議論の前提がずれているように感じます。「同じ日本人ならわかりあえる」という趣旨で、高木先生から信頼感のある言葉をいただきましたが、私はあまりそう楽観的にはなれません。同じ日本人でも、また私の場合は、精神科医療というさらに狭い範囲のなかでも、言葉が全く異なる人たちに出会うことがたくさんあります。看護師の言語、医師の言語、行政の言語、ケア対象者の方の言語、他職種の方の言語、これらすべて違うと思うことがあります。

「エビデンス」という言葉には、「客観性」という

意味がすでに含まれているのではないかと思います。1事例でも科学的だといっても、果たして本当にそれがエビデンスになるといえるのか。それで何かことを動かせるのか。こういうことをよく指摘される気がします。研究結果を誰に示したいか、どういう場合に示したいかにもよりますが、主に質的研究の場合は、文化や体験が異なる人たちを理解するとか、役割を明確にする(利害関係のある人たちに、自分たちはこういう役割であるということを示す)ために示されることが多いので、そういう目的であれば、1事例でも有効性はあるように思います。しかし、そこからさらに「コストと効果を示す」といったことを目的とする場合は、「1事例で質的研究? 何をいつているのだ?」といわれてしまうような気がします。エビデンスを示し、そしてそれを制度として普遍化していかなければいけないようなときは、「普遍性」がより大きな問題になります。共通理解が可能なだけではダメといわれるときもあるし、あるいは共通理解が可能な小さな理論が説明力を発揮して、その場の説得力をもつこともあるかもしれません。場によって目的によって、異なってくるように思います(図17)。

では、説得力のある研究方法とは何でしょう。これはひと言でいうと、権威ある研究方法です。それを使っていれば、皆が納得する傾向はあると思います。例えば高木先生が質的研究のことで科学論を展開されると、もともと統計をご専門にして、それを究めてきたという信頼感があるだけに、説得力が大きいかもしれません。しかし、質的研究しか行っていない人が「質的研究は万能です」といった場合にも信頼感があるかどうかという、どうなのでしょう。

さらに、質的研究においてどれほどすばらしい共通理解可能な概念や理論を提示したとしても、「1事例なんて」「質的研究なんて」と相手がもともと聞く意思をもたないところでは会話そのものが成立せず、否定されてしまう場合もあります。

しかしこのあたりは私たちにも責任があるように感じます。質的研究の結果や有用性を示すに

は、まず時間が長くかかります。どうしても要領よく研究のエッセンス部分を伝えられるかということ、考えなければいけないところだと思います。

最後に「質的研究 VS 量的研究なのか？」という問題がありますが、「共通理解できる部分がたくさんあって、自分が行なおうとしていることや自分の科学の捉え方は誰もが支持してくれるはずだ」という幻想をもつと、こっぴどく「そんなことはない」といわれます。といって、共通理解できるところが全くなくて、どうせわかりあえないから、と質的研究の研究者だけでまとまって量的研究の研究者とは話をしないとすると、同一のテーマに一緒に取り組んでいくことはできません。やはり、「理解できるところはお互いで異なっている」という前提に立ち、歩み寄って模索していくしかないのです。それをどのようにしていくのかを、考えていかなければいけないように思っています。

高木 萱間先生のおっしゃるように、理論構築のようなものを考えるときは、個々が共通理解に達しないことも当然あります。例えば看護師の言語と医師の言語は異なるということは確かにそのとおりだと思います。今日のお話ではバックグラウンドに構造構成主義というものがあり、モノの価値は、その人の関心や目的によって相関的に決まるという考え方があります。この点から考えると、例えば今日のお話にしても、興味がない人には価値がないといえ、価値がなくなってしまう。ここはある意味、乗り越えられないところです。研究目的と「関係がある」と思えば関係あるし、「エビデンスとして使いたい」と思えば使えることになる。その人のもっている価値観や目的で変わってしまっ、説得力をもたせることが難しい。実は、それが最も大きな問題です。理論的には「こういうふうになればいい」という結果を示しても、聞く耳をもたない人にはいくら説明してもわからない。このあたりは、こちらが辛抱強く続けていくくらいしか方法はないのではないかと思

- | | |
|-------------|-------------------------|
| ・ 体験を理解する | —— 文化の異なる人たち |
| ・ 役割を明確にする | —— 利害関係のある人たち |
| ・ コストと効果を示す | —— 制度にかかわる人たち |
| ・ エビデンスを示す | —— 活動と制度の正当性を示す必要のある人たち |

図 17 研究の結果を誰に示したいか

います。

理論や研究方法論は、ある程度、純化した考え方です。いろいろなモデルは、実は皆個別に異なっているわけですが、異なった状態からモデルを先につくってしまうとどうしようもなくなるので、だいたいのところできれいにするのです。統計学も、実際はそうです。無作為に、きれいにデータが取れていることはあまりない。だけど使ってしまう。正規性からの乱れがあったときにどうなるのか、などということを、かつては実際に研究しているのですね。たいして問題がないことはもうわかっているから、皆に使ってもらうことができるのです。

同じように、質的研究にもさまざまな研究方法論があると思います。グラウンデッド・セオリー・アプローチは非常に有名ですね。しかしグラウンデッド・セオリー・アプローチの手順を踏むとなぜいいのかということを、やはり説明しないとダメです。「これはグラウンデッド・セオリー・アプローチだからいいのだ」ではダメです。グラウンデッド・セオリー・アプローチを使うと、この言語の解釈がなぜ正当になるのか、なぜプロパティとディメンションを使ったほうがいいのか、ということをしちゃんと説明して記述しないとはいけません。「Strauss & Corbin の本に書いてある」では困るのです。本日お話してきた言語解釈や言語の恣意性などの観点からみて、プロパティやディメンションをきちんと書けば、恣意性をかなり限定して意味解釈を理解可能なものにすることが、理論的にはできるはずなのです。これは応用面なので、全員ができるとは限りません。応用面は個別の問題で、理論上そうであってもうまくいかないかもしれないし、もともと皆が同じ

概念を共有しているわけでもありません。勉強や経験をとて積んでいる人もいれば、そうではない人も当然います。初学者の学生と、研究に慣れた教授陣とは違います。そういう点からも、例えばスーパーバイザーがなぜ必要なのかを理論づけることも、ある程度できると思います。

それだけ、共通理解に達することは難しいのです。やはり、努力しなくてはダメだということ

かもしれません。どう努力するかといえば、ことあるごとにいい続けるくらいしかないかなとも思います(笑)。こういうことがきちんと解説された成書があれば、ある程度説明しやすいかなと思うのですが、質的研究のいろいろな本を読んでもなかなか書かれていないのです。それで仕方なく自分で考えて発言し、ご批判を仰いでいるのです。

Q&A・ディスカッション

Q 「質的研究 VS 量的研究」という図式を描くつもりはないのですが、ただ近年、質的研究が、統計学の力量をもたない研究者たちの1つの逃げ道になっているように感じており、とても危ないという思いをもっております。それから、質的データを取ってくる際、すでに研究者自身の認識のバイアスという問題があると思います。これをどうクリアするかが研究上のレディネスとして確立されない限り、研究が科学的か否かという問いにも進めないように思っています。臨床心理学者の故河合隼雄先生の著作を拝見すると、分析にあたって研究者であるご自身のバイアスを消す訓練をかなり受けてこられてきたことがわかります。質的研究は、研究方法論として練り上げられたものがすでにあると思うのですが、データを取ることに、分析にあたることに対するよい訓練があるなら、少し救いがあるように感じます。

高木 バイアスとは基本的にまず真値があって、その真値から系統的にずれているという状況をいいます。量的研究の立場から考えると、そういう意味です。データを取るときバイアスの問題がよく話題になりますが、どういう研究を行なうかによりけりではないでしょうか。まず何を知りたいのか。「心のなかを知りたい」なら、概念の構造や心理の構造を考えることになるかと思いますが。こうした構造を研究する場合、調査対象のセレクションにおけるバイアスとは少し異なる点があるのではないかと

と、私はいま思っています。確実に証明されてはいないのですが、意識調査などは、バイアスをかけて行なっても意外にまともな結果が得られたりすることがあります。なぜだろう、と思うのですが、恐らく多くの人の認識構造は社会的に構成されており、その部分が影響しているところがあるように考えています。

基本的に、質的研究は、informant から情報を取るために恣意的にデータを取りますね。量的研究の立場からすると非常にバイアスのある選び方です。しかし、それでもよいのではないかと思うのです。認識構造の社会的構成という、ある共通部分(すべてではないですが)がうまく抽出できれば、それはそれで価値があると私は思います。自分のデータの取り方にバイアスがあることさえわかっているならば、それを一般化するときその点を注意すればよいわけです。その事例に関して現象をうまく説明できるかが最初のステップで、そこから少しずつ拡張していけるかどうかを探っていく。そういう手順を取ればよいと思います。急激な一般化、例えば母集団への一般化や、糖尿病患者、がん患者、胃がん患者など母集団に関して、いきなりいってしまうことはダメですが、よく似た状況についての話なら拡張は可能でしょう。ですから、自分は何を対象としたのかを明示して、それについて分析することからスタートするといいいのではないかと思います。そういう形で研究を行なっていけば、それほど非科学的なものに

はならず、着実に進むのではないのでしょうか。
萱間 1 事例であっても、それを選んだ根拠がわかっていれば、ある程度共通理解の得られる結果がもたらされるということでしょうか。

高木 そうですね。ランダムに選べばそのあたりをクリアできますが、そうできない場合がほとんどなので、やはり自身で明示して、皆で議論できる場にしていけることが1つの方法です。このような研究が集積されていけば、なんらかの共通性が、そこからさらに出てくるがあるだろうと思います。

Q 私は心理学を専門としていますが、いろいろな研究はすべてナラティブ(物語・語り)であり、統計的方法を使うのも語りの1つの方法だという考え方があると思います。そのことについてどうお考えになりますでしょうか。もう1つは、mixed method について何かコメントをいただけないでしょうか。

高木 結局すべての研究は、最後はナラティブです。解釈をして、それについて物語らなければいけないわけですからね。物理学の世界であっても、やはり理論に対する説明は当然あります。統計学でも、質問紙調査などで比較的主観的なことを調べたりもします。その結果を示す際、「有意確率何パーセント」と記載されているだけの場合がよくあります。しかし最終的には、その数字にどういう意味があるのかをしっかりと記述して語らなければダメだし、そうしな

いと研究にならないですね。人間集団を扱う場合は特にそうです。そういうところも含めて考えれば、最終的な結果はすべてナラティブにならざるを得ないですね。

また mixed method に関してですが、人間を対象にする場合、その対象に関して測定可能な方法がいくつもあります。量的研究が使えるなら、それを使うほうが共通理解は得やすいし、使ったほうがいいに決まっています。しかしそうはいっても、量的研究で測れないものも残るわけで、その場合は必然的に質的研究を行なうしかありませんよね。昔は、質的研究を行なうということは、目に見えないものですから、心理学の分野でも尺度構成法などを用いて、多くの概念を数量化しました。私も最初のきっかけは心理学的な研究を行なっていて、行動計量学などといった系統から入っています。そのあたりを考えても、mixed method のような方法も、使える場合には使ったほうがいいだろうと思っています。

萱間 よい論文は、量的研究でも質的研究でも、きちんと解釈がなされていて、研究者自身の意見がしっかり展開されているものだと思います。質的な研究の解釈を深めていく場合、量的な裏づけがあったほうがいい場合もありますね。解釈をきちんと展開していく上で両方のデータを使い、それが本当に必要とされているものであれば、読む側も当然了解しやすいし、研究者の主張も明確に伝わってくるのではないかと思います。

■文献

- 池田清彦(1998). 構造主義科学論の冒険. 講談社学術文庫, 講談社.
- 中山康雄(2008). 科学哲学入門—知の形而上学. 勁草書房, p.71.
- 竹田青嗣(2001). 言語的思考—脱構築と現象学. 径書房.
- 西條剛央(2005). 構造構成主義とは何か—次世代人間科学

の原理. 北大路書房.

- フェルディナン・ド・ソシュール/相原奈津江, 秋津伶記(2003). フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義—エミール・コンスタンタンによる講義記録. エディット・バルク.
- ロバート・K. イン/近藤公彦訳(1996). ケーススタディの方法 第2版. 千倉書房.